

東京橫濱電鐵沿革史

序

待望のわが東京横濱電鐵株式會社の沿革史が成り、序文を草するに當り、聖壽の萬歲と國運の隆昌を祝賀し、併せて戰歿將士の遺靈に滿腔の弔意を表し、戰線に奮闘しつつある皇軍に對し、感謝の辭を捧ぐるものである。

顧ると私が舊東横電鐵の前身であつた武藏電氣鐵道株式會社の常務取締役に就任したのは大正九年五月であつた。

爾來二十有餘年、還暦を迎ふる今日迄の迂余曲折は一朝一夕に述べ盡し得ぬ底のものがある。或は自敍傳めく嫌があるやも知れぬが、極めて簡単に私の今日迄の體驗を敍し、大方の清鑑を乞ふ事とする。

私は邊陲なる信州の農村に生れた。松本中學を卒業後上京し、高等師範學校（現在の文理科大學）に入學し、卒業して伊勢四日市の商業學校に教鞭を執つたが、思ふ所があり辭して東京帝國大學に籍を置いた。然し元來學費の出所とである譯でなく、故嘉納治五郎先生の幹旋に依り、家庭教師として男爵富井政章家に寄寓し、其後加藤高明伯にも恩

顧を蒙り、明治四十四年に卒業した。翌年文官高等試験に合格すると共に農商務省の官吏の職に就いたが、さる事情の下に間もなく鐵道省に轉任し、前後九年半の官吏生活を送り、前記の如く武藏電鐵に關係するに至つたのである。

創立後十年餘を經過して居た武藏電鐵は、事業經營に適材が居らなかつた爲め全く進退谷まり、果ては鐵道敷設免許さへ取消されんとする危殆に頻して居たのを、故郷誠之助男が引受け經營する事となつたので、私は同男の招請に應じ鐵道省を辭し入社したのである。

斯くて從來の免許線の外に地下線に依る市内乗入（澁谷―有樂町間）の免許をも得、之等の建設資金として壹千萬圓の株式募集に着手したが、不幸にも大正九年の財界パニックに災され、七轉八倒の苦心も甲斐なく壹千萬圓の株式募集は愚か、遂には使用人の給料支拂にも窮する迄に至つた。

當時故澁澤子爵經營に係る田園都市株式會社が鐵道敷設に對し行き悩んでゐたので、同社の顧問格であつた小林一三氏から私に入社交渉があつたので、私は矢野恒太氏にも面接し、結局承諾する事とした。

私は田園都市會社から鐵道部を引きはなして新に目黒蒲田電鐵株式會社を設立し、そ

の後事務取締役就任した。

そこで武藏電鐵の建設事業は一時見送りの形とし、目蒲電鐵の目黒・田園調布間を開通せしめ、次いで武藏電鐵より蒲田支線を譲り受けてこれを開通せしめた。

然し武藏電鐵の事業の遂行は、私自身本來の眼目であつたので、大正十二年の關東大震災を機に、武藏電鐵の株式過半数が目蒲電鐵の所有となり、同社全役員の辭職を見るに及び、私は改めて目蒲電鐵の代表者として武藏電鐵の事務取締役に就任し、名稱を東京横濱電鐵株式會社と改めた。

此時以來目蒲・東横兩社は全く異體同心の形となつたのである。

東横電鐵の建設事業は其後急速に進捗し、多摩川・神奈川間を第一期とし、多摩川・澁谷間及神奈川・櫻木町間と順序に豫定通り完成するに至つた。

然し、昭和四年頃から同八年頃へかけての世界的財界不況時代に於て、目蒲電鐵は略順調の業績を繼續し得たが、東横電鐵は如何ともなし得なかつた。其収入は更に増加せず、借入金の利子は拂はねばならず、借入金の利息を拂へば、一文の配當も出來ないのみならず、每期赤字決算であつた。他方自動車業を開始して収入の一部を補ふ等銳意業績の向上に努め、且つ地方鐵道法による政府の補助を仰いでゐたに不拘、年五分の配當

も辛うじてなすと云ふ状態であつた。私は眞に告白するが、この頃の苦境を考へると、二度と再び孫子の代迄鐵道の新線建設はさせまいと決心した位であつた。

然しながら斯かる苦境にあつても將來の社運に囑望し、諸學校の誘致或は百貨店の經營等、沿線開發の源となるべき諸施設を建植した。謂はゞかうした潜勢力の涵養が今日をなすに至つたのである。

尙、私の理想としてきた電鐵の整備統合に就ても深く留意し、昭和八年には池上電鐵を目蒲電鐵に、同十一年には玉川電鐵を東横電鐵に夫々合併した。此間會社の業績培養に資する爲め、可及的有利とみる事業會社を新設し又は買收して、多角經營方針に向つて進んで來た。さうかうして居るうちに支那事變の勃發があり、物資及資金の統制をはじめ、あらゆる方面に於ける經濟統制が強化され周知の如き多難の秋となつたにも不拘、東横電鐵の業績は、目蒲電鐵の業績と對等合併する迄に昂上したので、昭和十四年四月、茲に兩社を合併し以て一丸とし、資本金は七千二百五十萬圓となつた。

以上の如く觀じ來ると、吾れながらよくも生命を保持し得たものであると聊か奇異の感さへするのである。昭和十六年十二月八日には米英に對し宣戰布告の大詔が煥發せられ、内外共に益々多事多難となり、事業統制も必然的に切迫して來たので、當東横電鐵

と京濱・小田急との合流も勢ひその機運に逢着したので、遂に昭和十七年二月七日、三社合併の契約が成立、同年五月一日圓滿に之が實施を見るに至り、資本金は實に貳億四百八拾萬圓となつたのである。

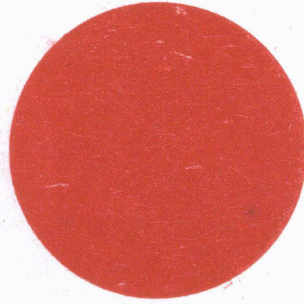
本文を草した昭和十七年五月二十三日は、右に就き經過報告其他をなした臨時株主總會の當日である。終りに臨み東横電鐵や目蒲電鐵創立當初より私と困難辛苦を共にせられてきたる、篠原事務や鈴木、三宮兩取締役を初めとして、社員各位の御援助に對し深き敬意を表するものである。

東京横濱電鐵株式會社を過去の歴史に繰り入れ、新たな發足の下に、更に將來への展開を企圖し、曠古の輝しい聖代の恩澤の萬分の一にも酬る奉らんとするものである。

昭和十七年五月

東京横濱電鐵株式會社

取締役社長 五 島 慶 太



社 是

一、至誠報國

萬邦無比ナル我カ國體ノ本義ニ則リ
盡忠報國ノ念ニ生クヘシ

一、感恩奉仕

常ニ公共ノ恩澤ヲ念ヒ各職分ヲ盡シ
テ社會ニ奉仕スヘシ

一、創造進取

大ニ智識ヲ廣メ新クニ機軸ヲ出シ盛
ニ事業ヲ振起スヘシ

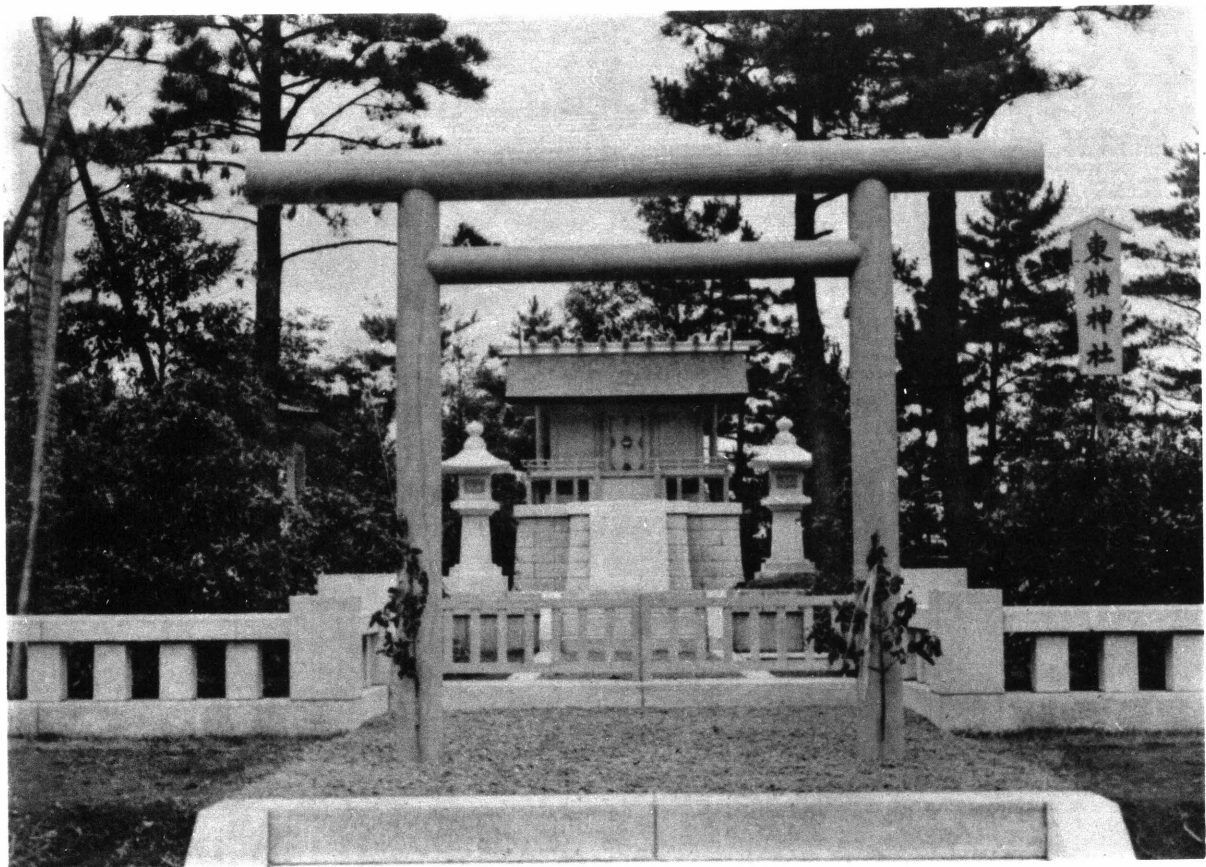
一、志操高潔

道ヲ謀リテ食ヲ謀ラス百般ノ行爲ハ
當代ノ儀表タルヘシ

一、和衷協力

和ヲ以テ貴シトシ上下相信シ協力業
務ニ勉勵スヘシ





東 横 神 社



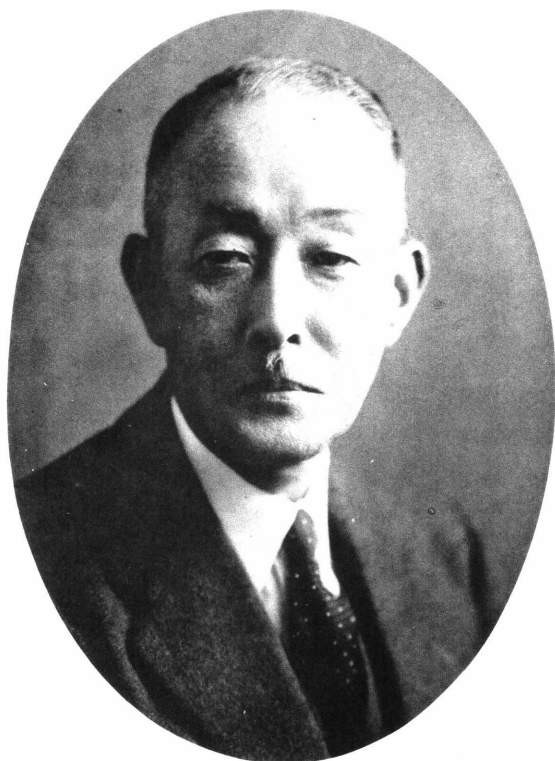
田園都市創設者
故子爵澁澤榮一翁



長 社 役 締 取
氏 太 慶 島 五



専務取締役
篠原三千郎氏



役締取務常
氏朝武羽丹



役締取務常
氏郎太知本山



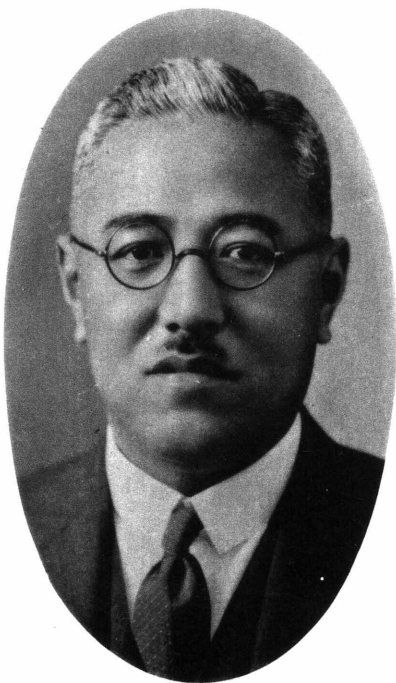
役締取務常
氏郎次宮小



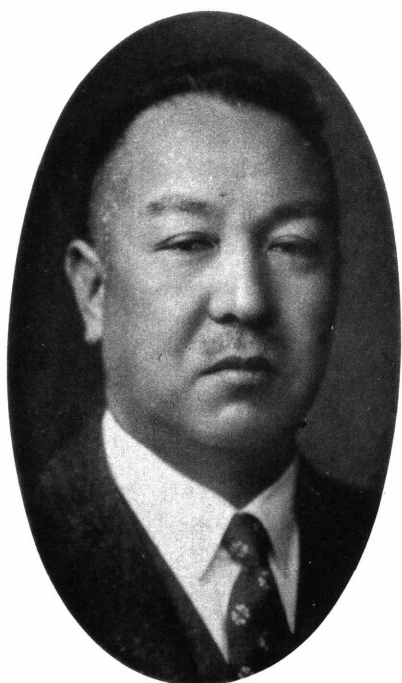
取 締 役
中 川 正 左 氏



取 締 役
伍 堂 卓 雄 氏



取 締 役
緒 明 太 郎 氏



取 締 役
武 鶴 次 郎 氏



役 締 取
氏 七 幸 木 鈴



役 締 取
氏 吉 榮 花 立



役 締 取
氏 雄 清 林 小



役 締 取
氏 郎 四 宮 三



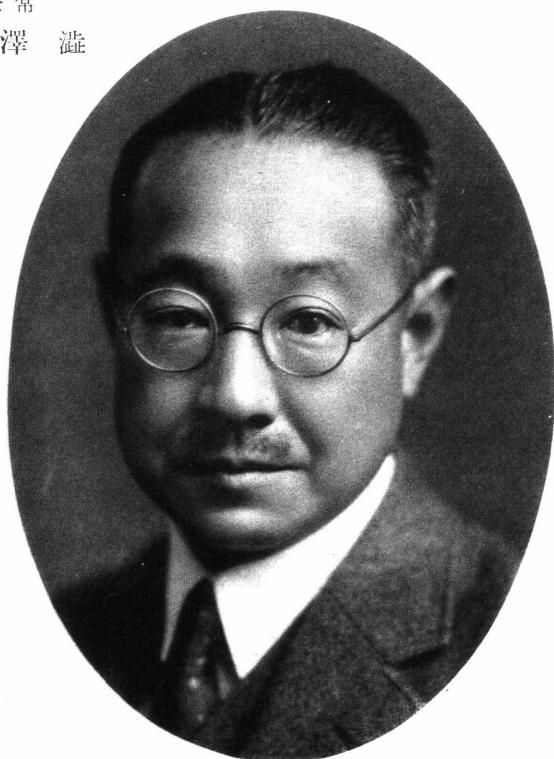
役 締 取
氏 夫 武 川 尾



役査監任常
氏雄秀澤澁



役査監
氏郎太善川石



役査監
氏郎二利邊渡



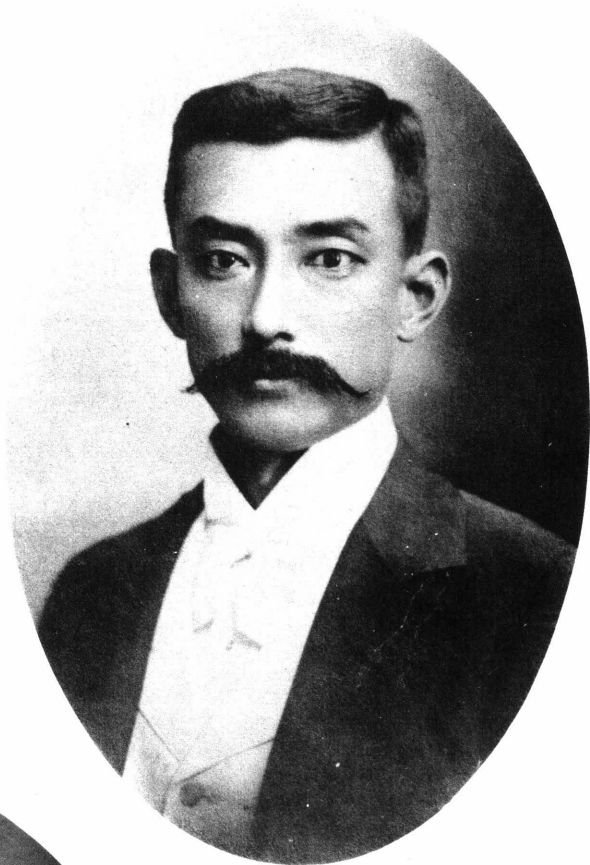
元田園市社會々長
故中野武營氏



元田園市社會々長
故市原求氏



元田園市社會々長
故竹田政智氏



長々社會鐵電藏武元
氏武衛治田岡故



長々社會鐵電藏武元
氏郎次金澤廣爵伯故



長々社會市都園田元
長々社會鐵電兩橫東舊・浦目
氏 太 恒 野 矢



長會役締取鐵電藏武元
氏 助 之 誠 郷 爵男 故



元田園都市社會取締役
故 服部 金太郎 氏



元田園都市社會取締役
故 星 野 錫 氏



社會鐵電兩橫東舊・蒲目元
役査監 役締取
氏 三 一 林 小



社會鐵電兩橫東舊・蒲目元
役締取務常
氏 郎 太 由 浦 松 故

今

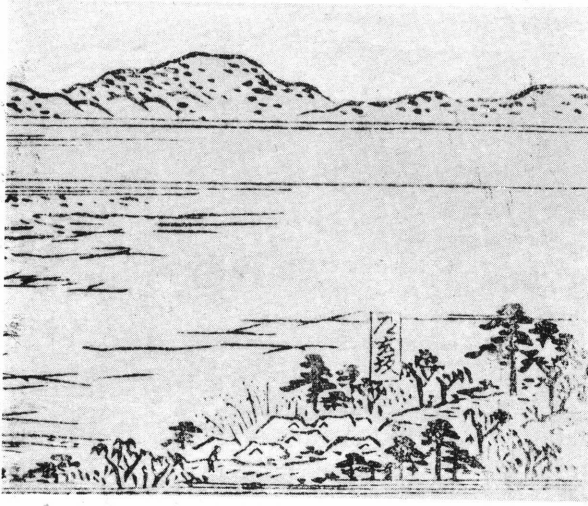
昔

諸

相



昭和六十一年の神奈川



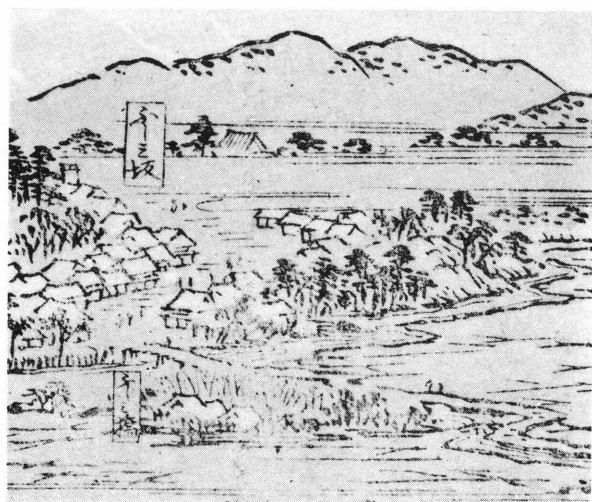
江戸末期の宮益（ふじ見坂）と道玄坂



大正五年頃の道玄坂下



現時の澁谷驛前



(長谷川雪且筆)



大正五年頃の宮益坂



現時の宮益坂下

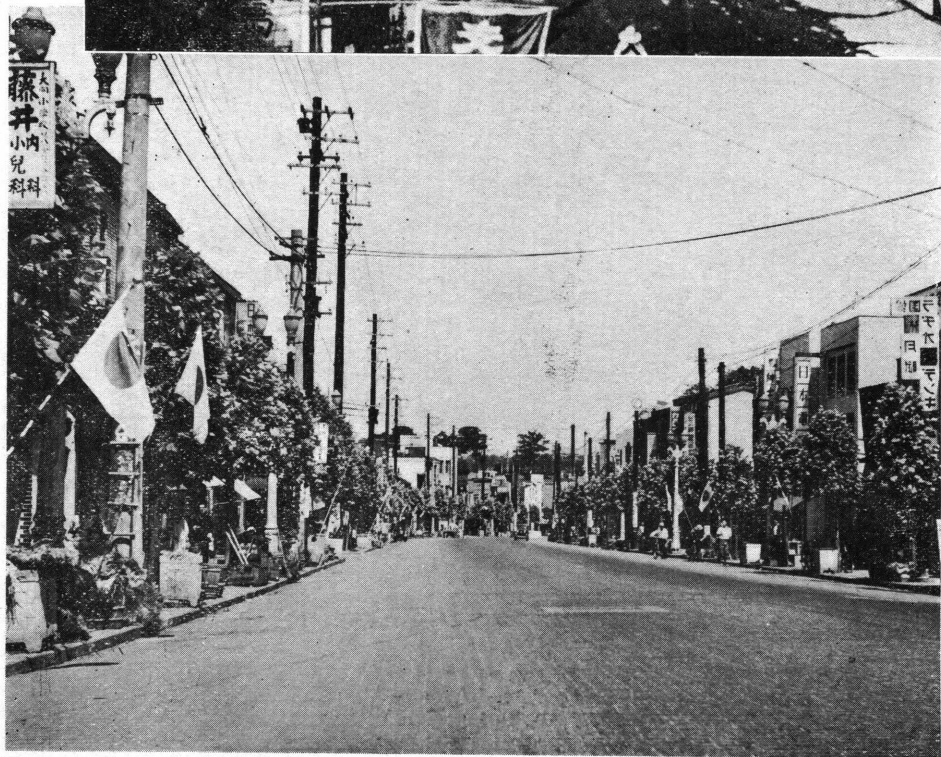


明治四十年頃玉電工事中の道玄坂上



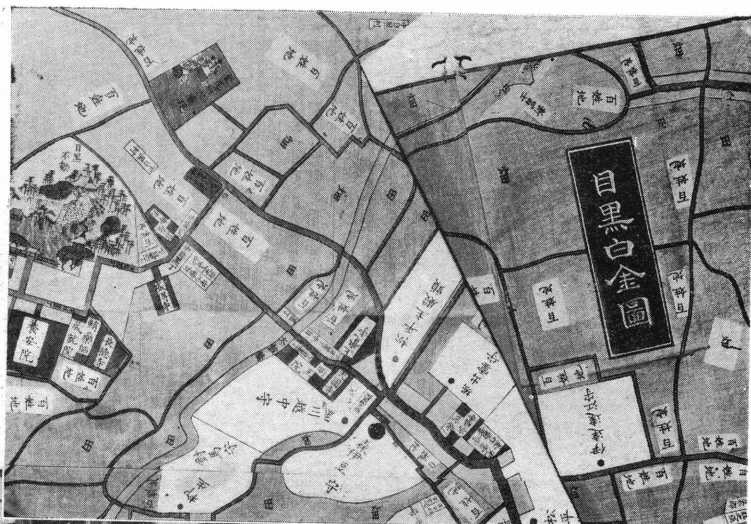
現時の道玄坂上

大正三年頃の道玄坂



現在の道玄坂

江戸末期の目黒行八坂權之助坂附近圖



目黒驛

權之助坂を望む

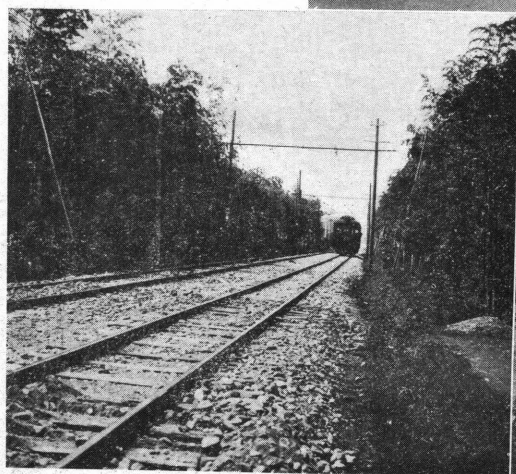




往時の洗足池



現今の洗足池

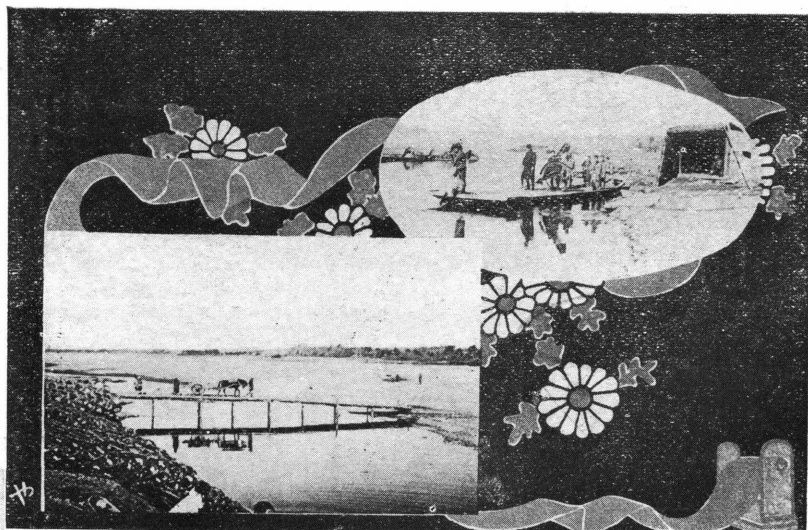


昭和二年東横線開通當時の碑文驛附近

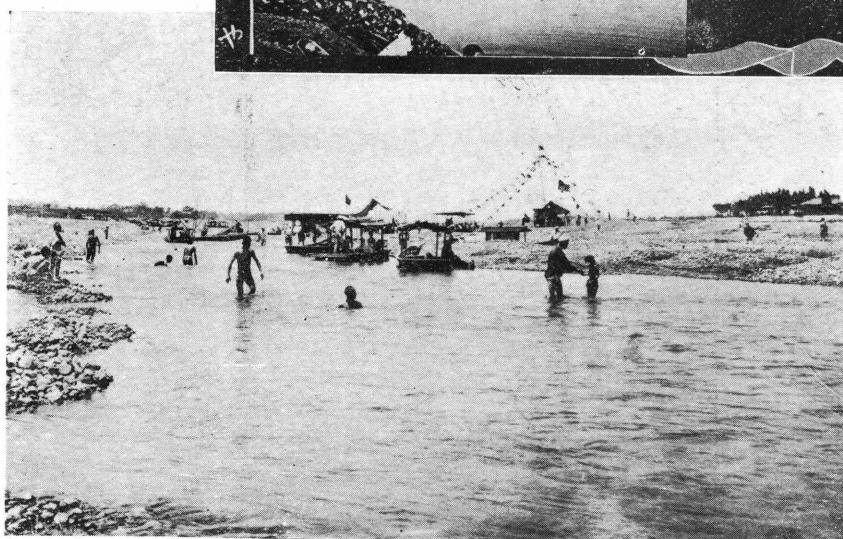


現在の碑文驛附近

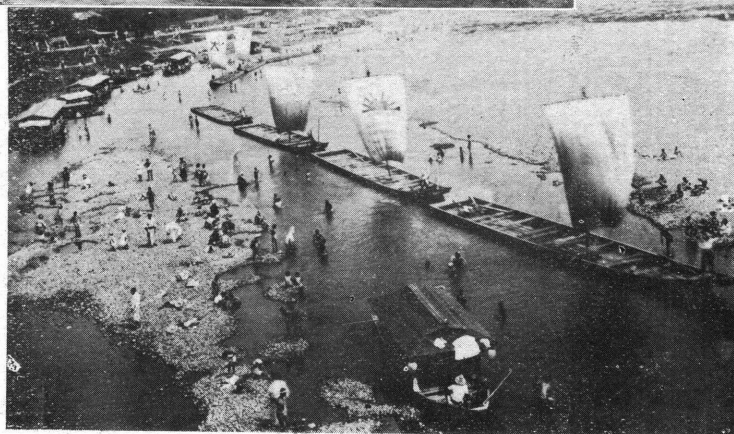
明治四十年頃の二子玉川渡し



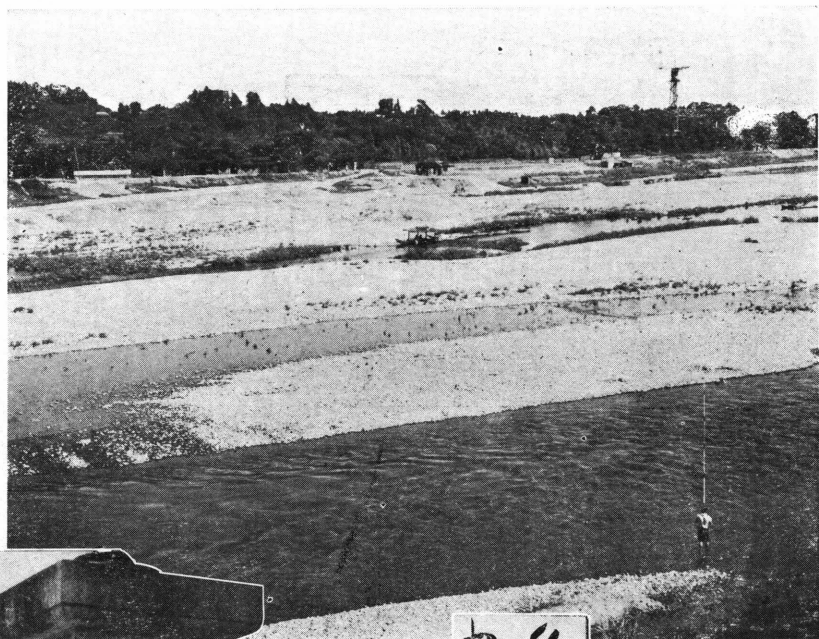
大正六年頃の玉川兵庫島近附



大正十五年頃の二子玉川
砂利採集舟の歸帆



現在の二子玉川



多摩川の砂にばんぱくうは
われにもわふ人のあれかしぬれ

多摩川の浅き流れに石投げて

遊べば濡るるわが袂かな

瀬も浅く藍もうすらに多摩川の

ながれてありぬうしや二月は

曇日の川原の蘆の白砂に

あしあにつけて啼く千鳥かな

友もうし誰とあそばむ明日もまた

多摩の川原に來てあそばなむ

(明治四十二年二月作)

子丸の頃年一十正大



子丸の期末戸江



橋子丸



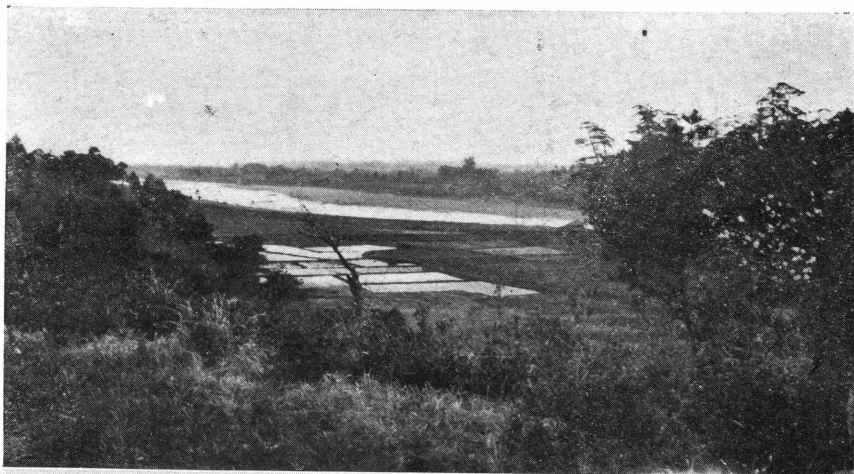
子丸の頃年四和昭



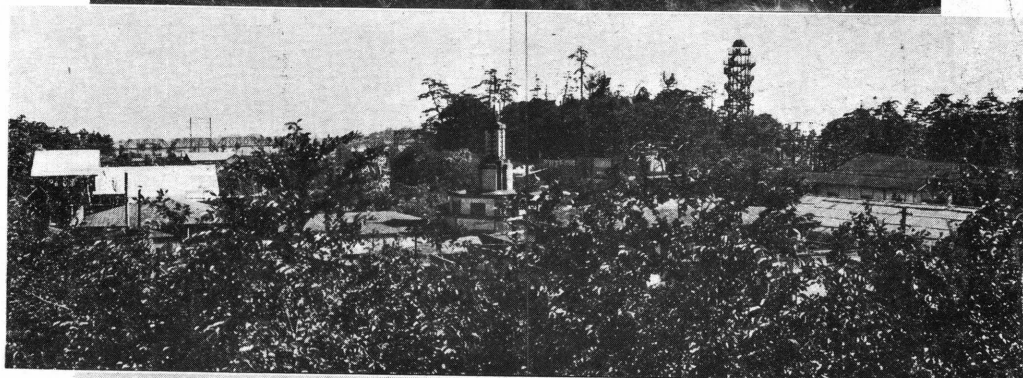
A black and white photograph showing a group of about six men in dark suits standing near a railway track. They are gathered around a small, white, peaked-roof structure, possibly a signal box or a small shed. A tall utility pole stands nearby. The scene is outdoors, with trees and a body of water visible in the background. The ground is dirt and there are some scattered objects, possibly tools or debris, near the structure.

五島慶大氏	緒明圭造氏	佐久間吉備彦氏	松浦由太郎氏	石川善太郎氏	市原求氏	篠原三千郎氏	小林一三氏	伊藤欣二氏	河野通氏	竹田政智氏	下村猛氏	向右より
-------	-------	---------	--------	--------	------	--------	-------	-------	------	-------	------	------

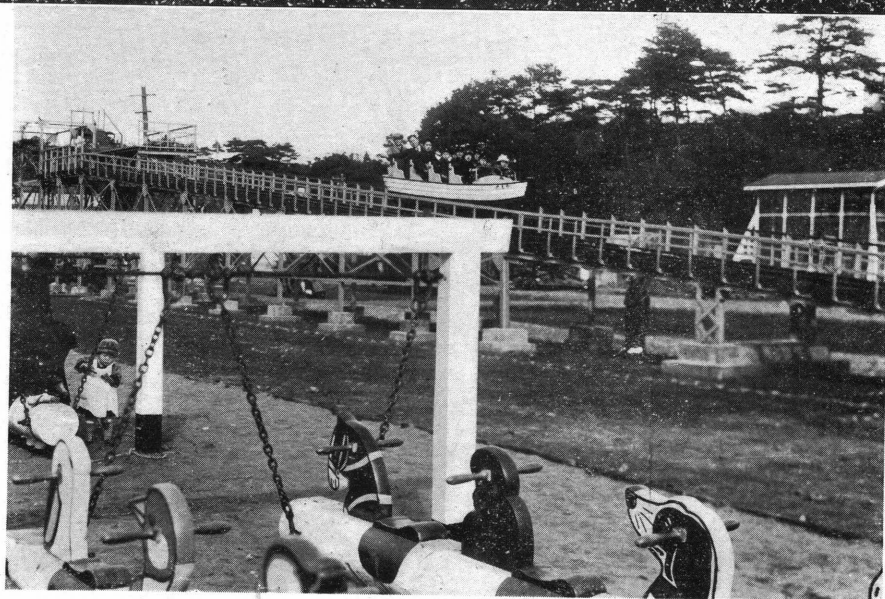
大正七八年頃の沼部石苺谷（多摩川園敷地）



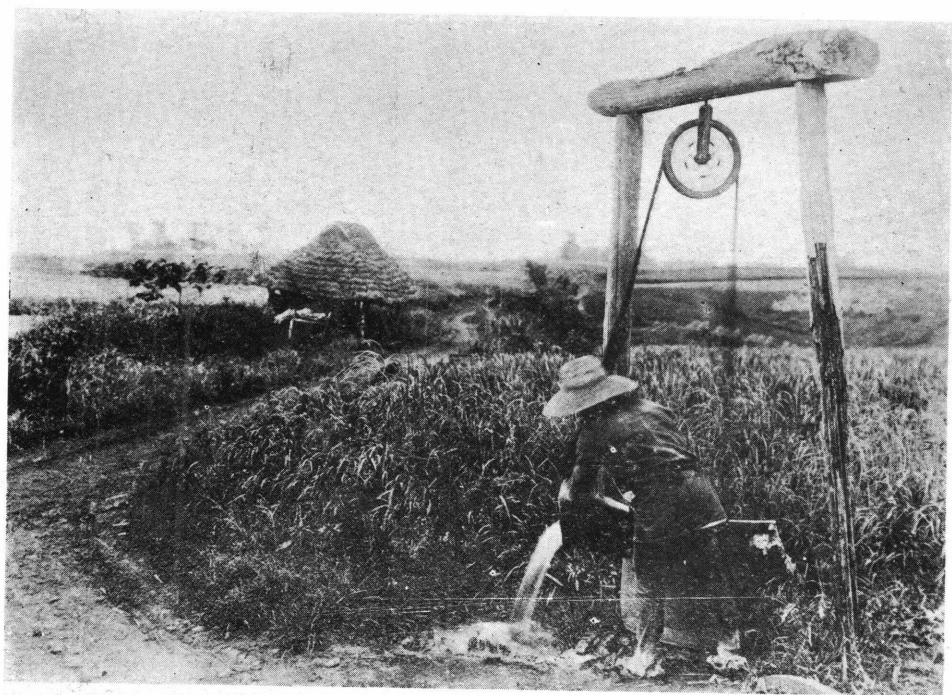
昭和十六年の多摩川園全景



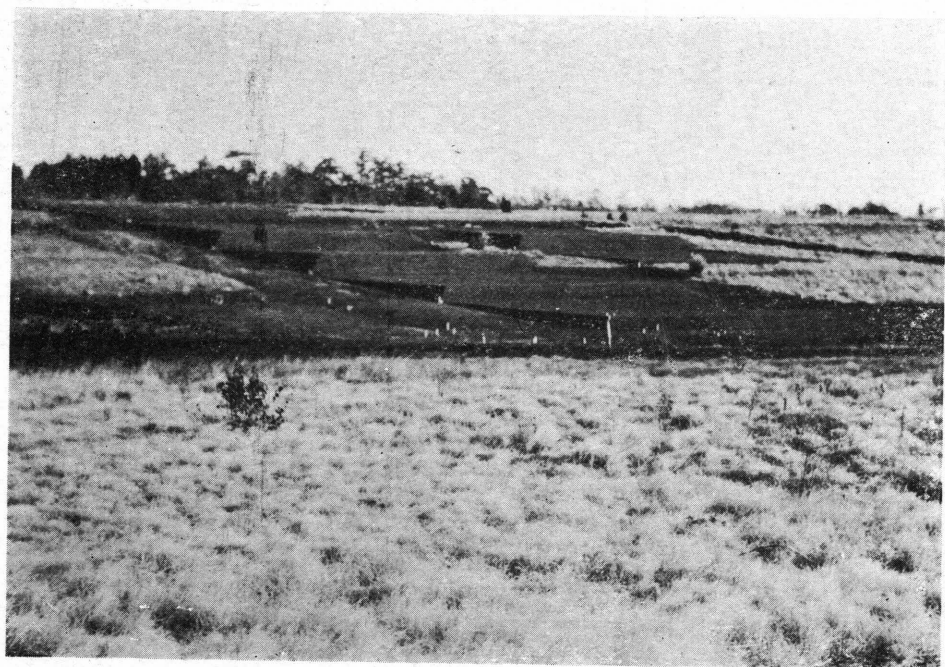
同上園内一部



往時の沼部（田園都市建設地）

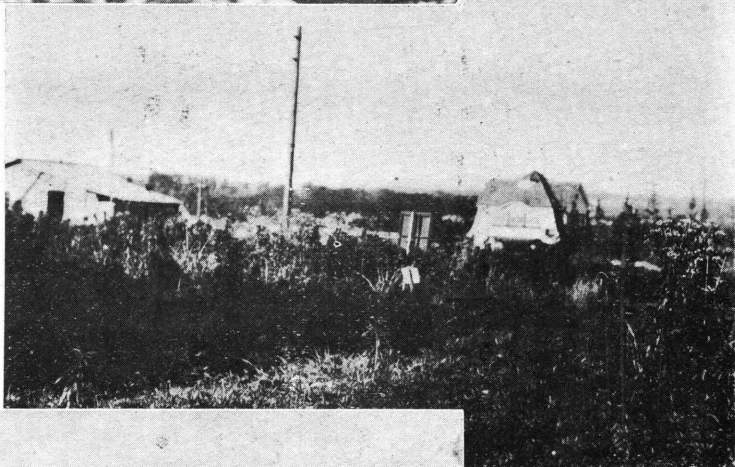


大正八、九年頃今讓開始の調布





大正八年頃の調布村花野附近

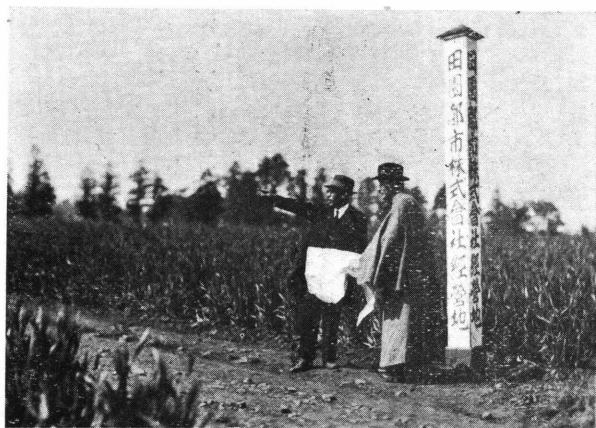


大正十一年頃草原中の田園調布驛

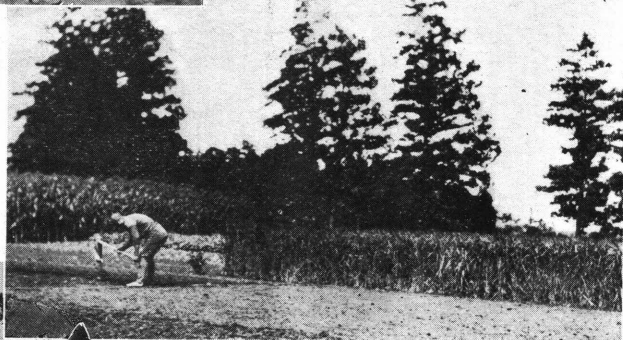


大正十一年頃の田園調布驛前

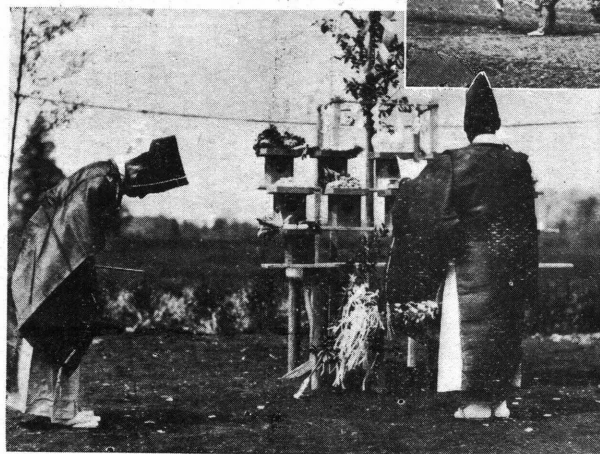
大正十一年頃の田園都市經營地



大正十一年頃の
開拓前の洗足附近



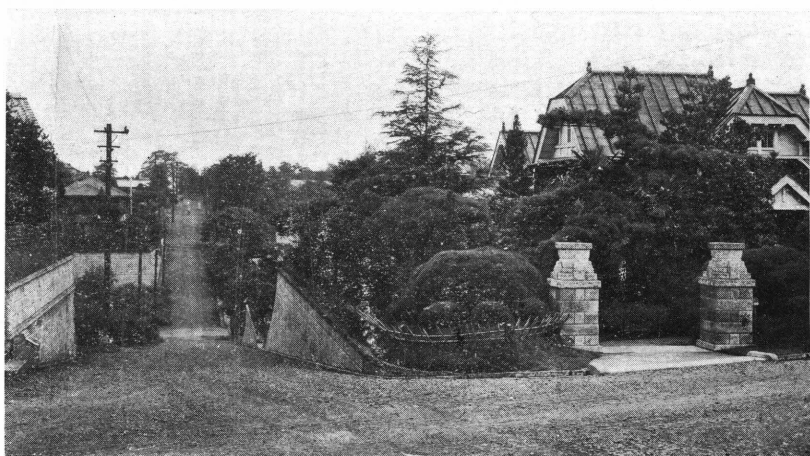
大正十一年田園都市
洗足分譲地起工式



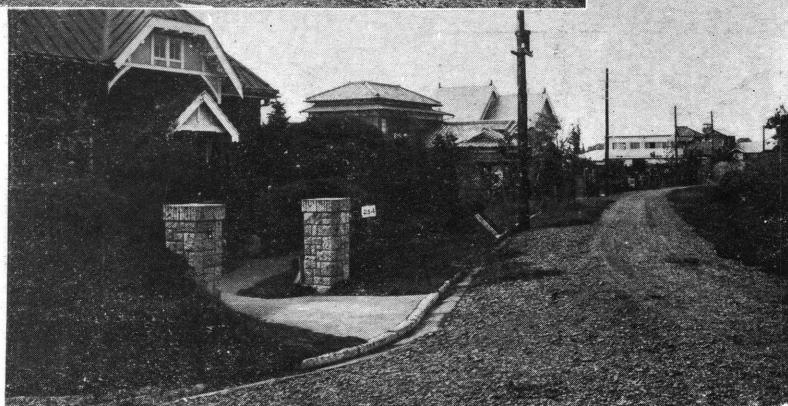
大正十一年整地中の
洗足分譲地



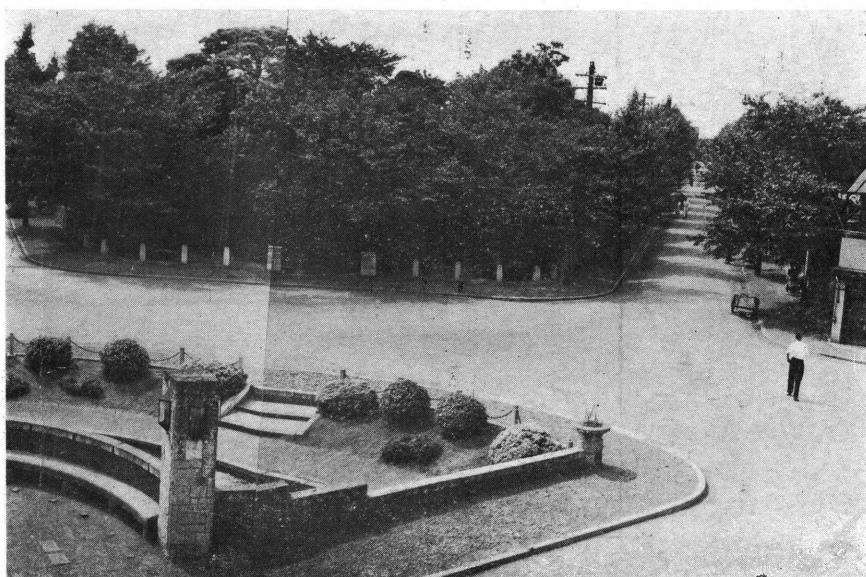
整備成れる田園都市（其一）



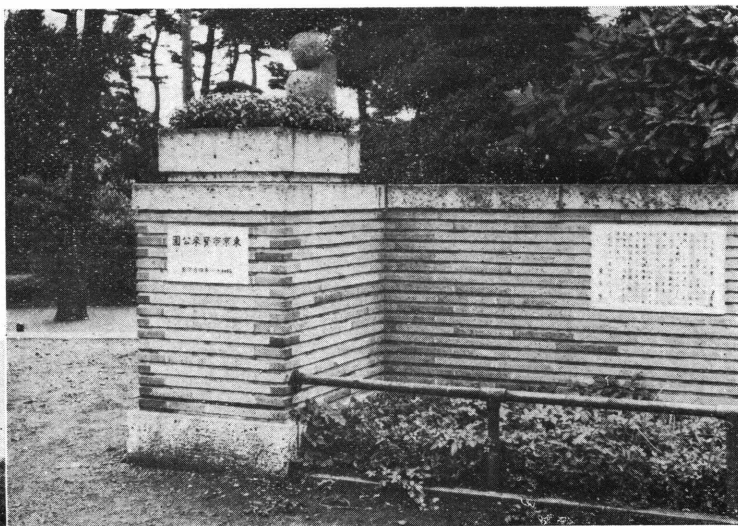
（其 二）



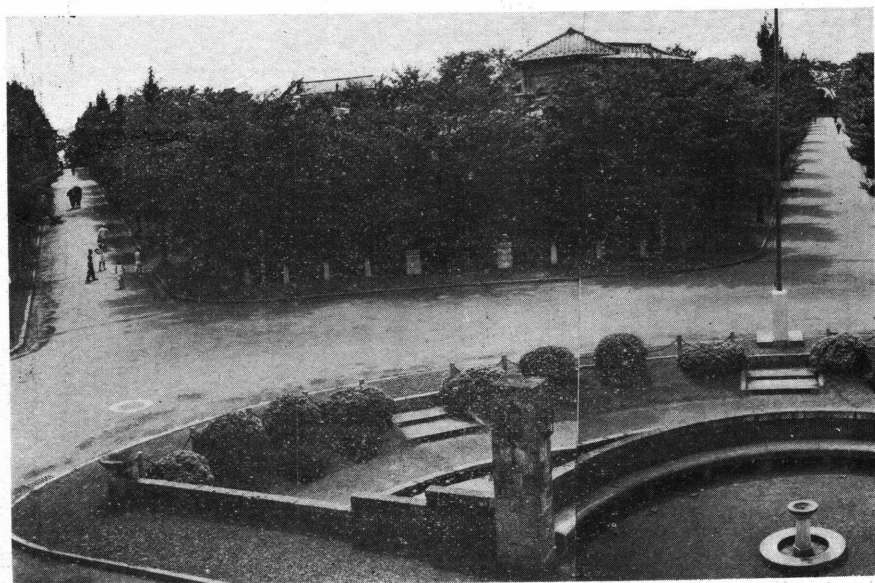
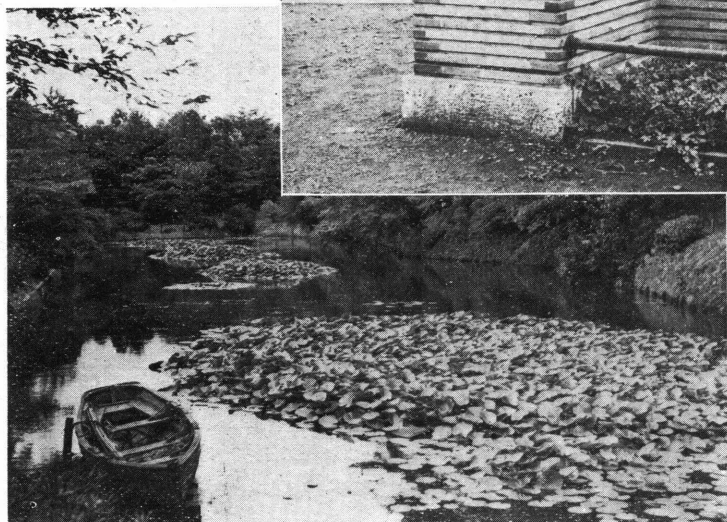
田園調布驛前の廣場



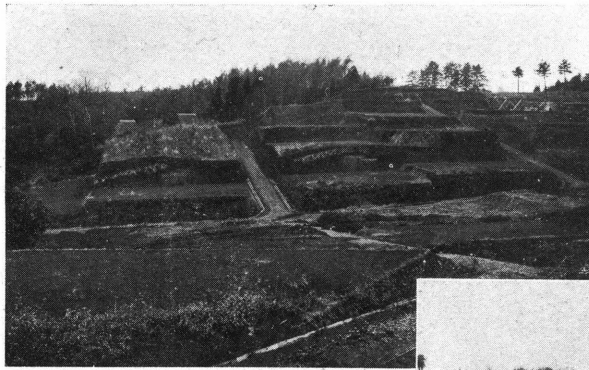
(其三) 寶來公園



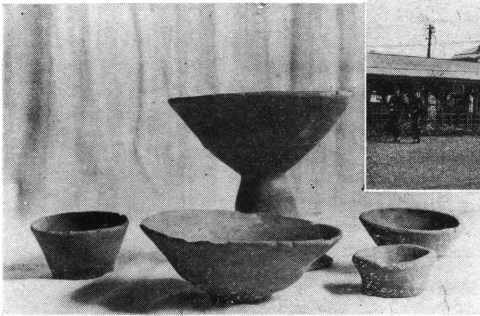
(其四) 寶來公園



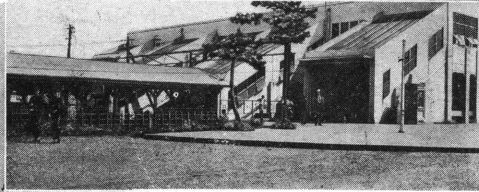
大正十一年頃の日吉台



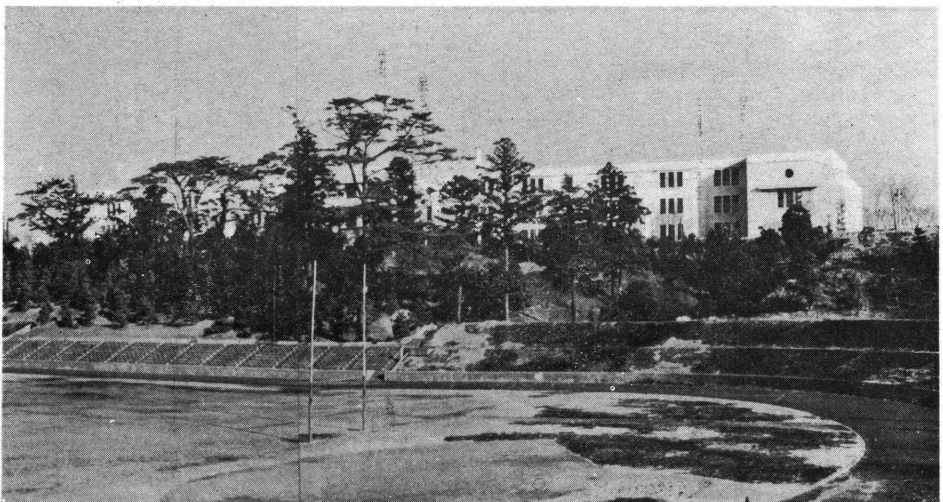
大正十一年頃の日吉驛



日吉より發掘された土器

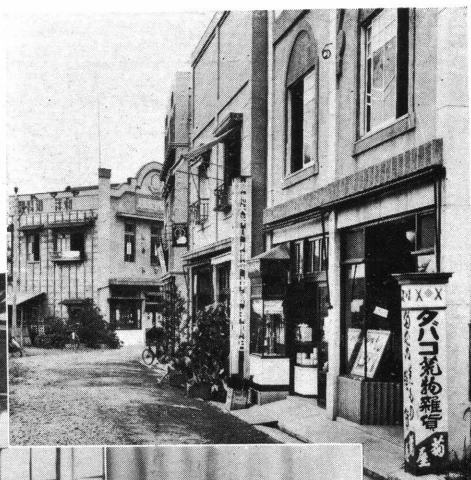


現時の日吉驛

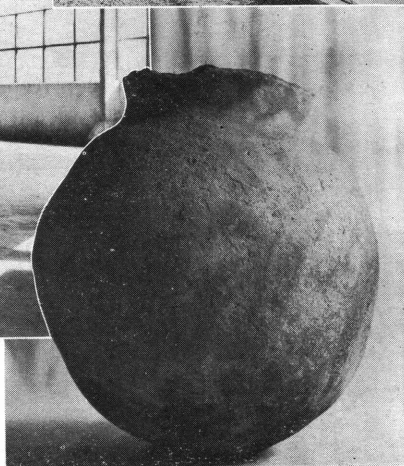


日吉台の慶應

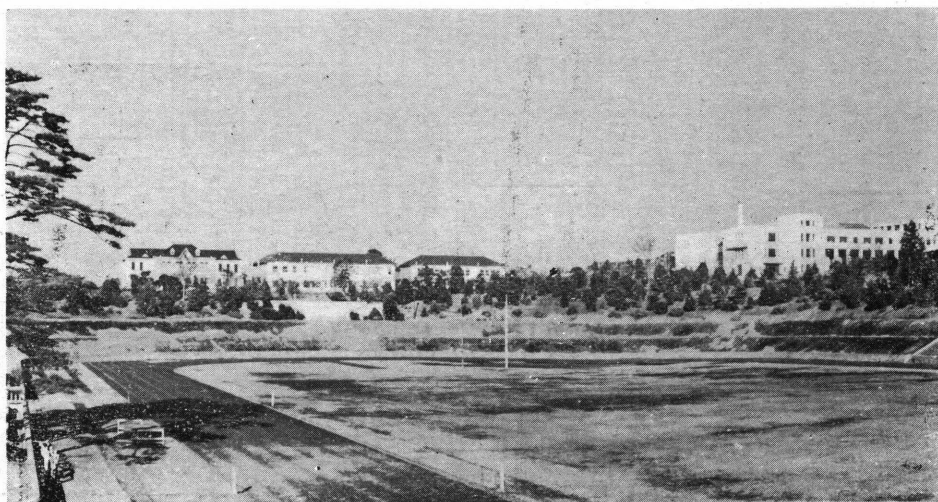
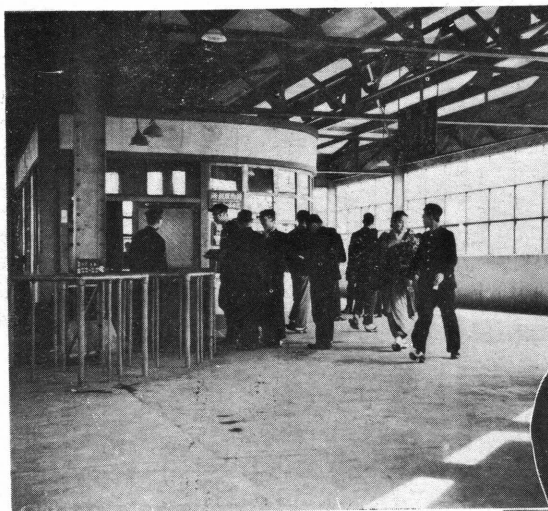
昭和十六年頃の日吉商店街



日吉台より發掘せられたる土器

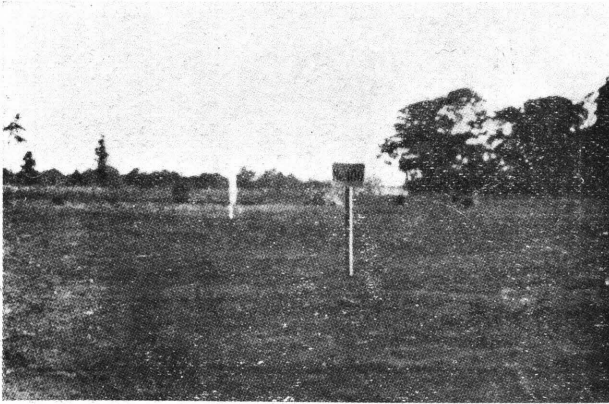


驛吉日の在現

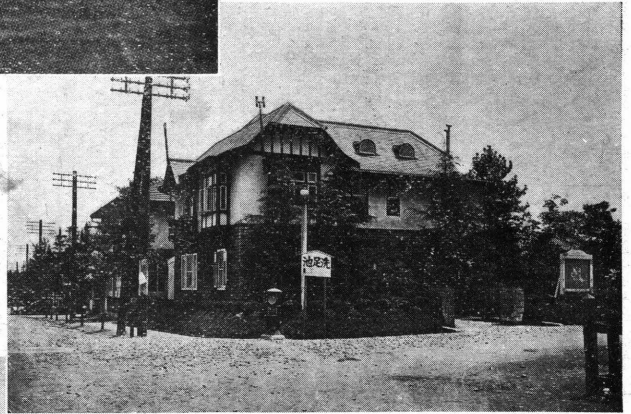


大豫學科全景

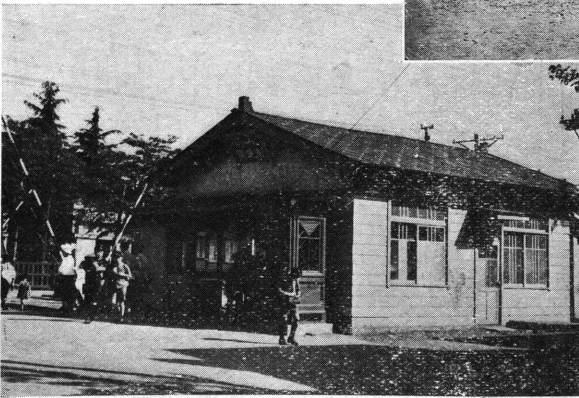
大正十一年賣出當時の洗足地區



大正十一年頃の
洗足事務所



現在の洗足驛



現在の洗足住宅地

